

令和元年6月10日現在

機関番号：13802

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26463340

研究課題名(和文)慢性腰痛患者の痛みに対する認識・態度を測定する国際的尺度の開発

研究課題名(英文) Development of an international scale to assess perceptions and attitudes toward pain in patients with chronic low back pain

研究代表者

佐藤 直美 (SATO, Naomi)

浜松医科大学・医学部・教授

研究者番号：10293630

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、慢性腰痛患者の痛みに対する認識・向き合う態度を測定するための、国際的に共通して使用可能な尺度を開発することを目的とした。米国と日本において、慢性腰痛患者を対象にインタビューを実施した。インタビューからは、【長く続く一生ものの痛みということは仕方がない】【今よりも悪い状態にはなりたくない】【自分なりに対処している】【痛みによって生活が制限される】【安心させてくれるものがある】というカテゴリーが導き出された。これらの因子からなる合計32項目の質問紙案を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

腰痛を生物・心理・社会的疼痛症候群とする新たな捉え方がなされるようになってきており、特に難治性の慢性腰痛では心身医学的アプローチが注目されている中で、患者が痛みをどのように認識して向き合っているかを把握することは、介入前のアセスメントにおいても、評価においても重要である。本研究で開発された尺度案がさらにブラッシュアップされ、臨床的に使用可能となれば、慢性腰痛患者の評価において有用な指標となりうると考える。

研究成果の概要(英文)：Low back pain has been captured as biological, psychological and social pain syndrome. To understand how patients perceive and confront their pain is essential. The purpose of this study was to develop an international scale to assess perceptions and attitudes toward pain in patients with chronic low back pain. In the U.S. and Japan, interviews for generating candidate items that compose the scale were conducted. Five categories were emerged; [There are no reasons for long-term chronic pain], [Just will not worsen], [Have something to help me], [Pain restricts my life], [Have something to relieve me]. A draft scale with 32 items consisting of these factors was developed.

研究分野：臨床看護学

キーワード：慢性腰痛 痛み 認識 態度 尺度開発

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

腰痛はその生涯有病率が 60-80% であり、ほとんどの人が経験するものである。我が国においても腰痛は多い主訴であり、国民生活基礎調査¹⁾では、主要な症状のなかで腰痛の有訴者数が男女ともに最も多い。治療を要するほどの腰痛を経験した人のうち、約 30% が毎年腰痛を繰り返し、3 ヶ月以上続く腰痛を慢性腰痛と定義すると、60% 以上の人々が慢性腰痛を経験しているという報告もある²⁾。また、Carey ら³⁾は慢性化した腰痛患者の 67% は発症 22 ヶ月後も日常生活に支障をきたしていると報告しており、一度慢性化した腰痛は治癒が困難であると推測される。

欧米の臨床疫学的研究によると、腰痛の社会的背景としては、文化、家族と社会の支援、社会階級、教育、仕事の満足度と社会心理的側面、雇用管理と労働関係、失業、早期引退、労災補償、訴訟などが挙げられている。文化は腰痛に対する考え方、とらえ方、表現の仕方に影響を与え、治療に対する反応性も文化の影響を受ける。また、急性腰痛の慢性化による腰痛関連機能障害に心理・社会的因子が深く関与していることが示され、心理的因子が腰痛出現様式に影響することも明らかになってきている⁴⁾。痛みの自己管理能力が慢性腰痛と腰痛関連機能障害に関与していることも示されている。日本人を対象とした調査としては、日本整形外科学会プロジェクト委員会による疫学調査が行われ、ストレスイベント得点が多くなることで腰痛の発症オッズを上昇させ、SF-36 (健康関連 QOL 尺度) の心の健康得点が増える (うつが少ない) につれて発症オッズが減少することが示された⁵⁾。このように、腰痛は従来「脊椎の形態学的異常」としてとらえられてきたが、近年では腰痛を「生物・心理・社会的疼痛症候群」という概念でとらえようという動きが出てきている⁴⁾。

このような考えを背景に、一般的な身体的治療では難治性の、慢性に腰痛が持続する患者に対する心身医学的なアプローチが注目されてきている⁶⁾。なかでも行動・認知・感情・環境など患者の痛みを取り巻く状況を多面的・包括的に理解し介入する認知行動療法が有効であることが示され⁷⁾⁸⁾、我が国でも実施されるようになってきている。

一方、「慢性腰痛」をキーワードに国内の看護研究文献を検索すると、慢性腰痛を持つ高齢者に対して温罨法の効果を検証したものが 2 件あるのみであり、「腰痛」に関する看護研究としては、看護師の腰痛についての実態調査や軽減方法を検討したもの、腰痛を生じやすい検査や手術後の患者の痛み軽減方法を検討したものなどがほとんどである。腰痛、特に慢性腰痛で長期にわたって受診をする患者に対しては、上記のように包括的視点で患者を理解することが重要視されてきており、主にそのような患者と接する外来での看護の役割は決して小さくはないと考えられる。しかしそのような患者を対象にした看護研究はほとんどされてきていないのが現状である。腰痛を含む痛みは主観的な体験であり、それをどうとらえ、解釈するか、どう向き合うかは個々により、また、人種や民族などによっても異なり、それは上述のように様々な要因に影響を受けていると考えられる。これまで、腰痛患者を対象とした調査では、腰痛特異的 QOL 尺度である Roland-Morris Disability Questionnaire が開発され、日本語にも訳され使用されている⁹⁾が、患者の痛みという主観的な体験を理解することに主眼をおいた研究はほとんどなく、疼痛のとらえ方、向き合う態度に関する研究は現在のところ見られない。慢性腰痛に対する心身医学的なアプローチを試みる際に、その方法の検討にも、結果の評価においても、患者が痛みをどのように認識して向き合っているかを把握することは重要であると考えられる。

(文献省略)

2. 研究の目的

本研究は、慢性腰痛患者の痛みに対する認識・向き合う態度を測定するための、国際的に共通して使用可能な尺度を開発することを目的とした。

3. 研究の方法

まず、米国と日本でインタビュー調査を行った。米国の University of St. Augustine for Health Science 付属のクリニック、および日本では大阪市にある総合病院に理学療法のために

来院している慢性腰痛患者を対象にした。インタビューガイドを英語・日本語で準備し、インタビュー内容は腰痛発症の経緯、発症してからの治療、痛みが長引いていることへの思い、痛みがあることでの影響、痛みがあることの自分にとっての意味、痛みに対して行っていることなどであった。語りの内容を逐語録にし、内容の類似性によって分類し、カテゴリー化した。

4. 研究成果

インタビューの対象者は日本人7名(男性3名、女性4名)、米国人10名(男性7名、女性3名)であった。年代は日本人では40代1名、60代1名、70代2名、80代3名で、米国では、50代1名、60代1名、70代6名、80代2名であった。語りのデータから、【長く続く一生ものの痛みということは仕方がない】【今よりも悪い状態にはなりたくない】【自分なりに対処している】【痛みによって生活が制限される】【安心させてくれるものがある】というカテゴリーが導き出された。

これらの因子から成る合計32項目の質問紙案を作成した。個々の質問項目は、カテゴリーを構成するサブカテゴリーを基本に作成した。これらはまだ素案の段階であるが、今後の本調査で信頼性・妥当性を検証し臨床的に使用可能かどうか検証する。質問紙の項目には、日本人の対象者から得られた項目と米国の対象者から得られた項目、両者から得られた項目が混在しており、文化的差異なども含めた複数の国で使用可能な尺度であると期待できる。国際比較研究で使用するなど発展が期待できる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 2 件)

Sato N, et al.: Perceptions and Attitudes toward Pain in Patients with Chronic Low-Back Pain. 20th International Conference on Adult Nursing and Health Planning, 2018.

佐藤直美他：慢性腰痛患者の痛みに対する認識・態度，第38回日本疼痛学会，2016.

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：佐藤 友紀

ローマ字氏名：SATO, tomonori

所属研究機関名：常葉大学

部局名：健康科学部静岡理学療法学科

職名：教授

研究者番号（8桁）：10550303

(2)研究協力者

研究協力者氏名：増井 健二

ローマ字氏名：MASUI, kenji

研究協力者氏名：Stanborough Rob

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。